

## 遊行女婦の「橘の歌一首」

新谷正雄

### 要旨

遊行女婦<sup>うかれめ</sup>の特殊な歌表現の質を見出したく、取り上げたのは無名の遊行女婦の巻8・一四九二歌である。「成り」「花」は、女の結婚にからむ譬喩として使われる言葉である。亡妻挽歌（巻19・四三三六〜七歌）を誦詠した遊行女婦蒲生<sup>かまよ</sup>の例から、当該歌も男の立場から歌ったものと考ええる。座の男達の心を一つに括り、恋情表現からする女への讚美、またそれを通し、一組の新婚の男女と、婿を迎えた家を言祝<sup>ことほ</sup>いだものと考えた。

## 一 はじめに

遊行女婦は万葉の歌人として繰り返し考察の対象となって来た。しかし稿者の見る所、必ずしもその研究は深められて来なかったように思うのである。その要因には幾つか考えられるが、一つには遊行女婦の範囲の問題がある。遊行女婦と明記される者以外、特に娘子と呼ばれる女性達の誰を遊行女婦と認定するかという点に於て、それが曖昧なままに論じられて来た、或は論者それぞれの根拠が異ったまま論じられて来た為、研究が積み重ねられて来なかったと考えるのである。二つ目は歌表現の分析の問題である。遊行女婦は或る時代に生きた特殊な女性達であったと考えられる。とするならば、同時代の歌表現の質を持ちながら、一方で特殊な表現の質を持っていたであろう。他との違いを見出し、遊行女婦歌の特質を抽出して行く為には、精緻な表現の分析が要求される。この点に於ても、従来の研究は問題を残しているのではないかと考えるのである。

本稿で取り上げ考察を加えるのは、次の遊行女婦歌一首である。述べた後者の問題に関連し、殆どその意味が明らかにされて来なかったと考える為である。

橘の歌一首 遊行女婦<sup>(1)</sup>

君が家の花橘は成りにけり花なる時に逢はましものを

(8・一四九二)

## 二 問題

作者名は未詳である。但し題詞下の注により、作者は遊行女婦であると知られる。作者を題詞に記す巻八にあって、注の形でそれが示されるのは異例である。また作者は遊行女婦とあるのみで名が書かれていない。名が記される他の遊行女婦歌と比べ、これも異例である。作者名不記の問題についても後に触れる事にしたい。

一首の意味は改めて示す必要も無い程に明らかだが、参考に岩波新大系の訳を次に掲げておく。

あなたの家の花橘はもう実になってしまいました。花であった時に逢えたらよかったのに。

表面上の意味は明らかなのものの、しかしその作意、何を意図して歌ったものか、という点については、述べたように、明らかにされて来なかったように思われる。遊行女婦歌を主題に据えた論に於てさえ、この歌に触れる事が少なく、その意味付けはできていなかったと言える。

例えば中西進「遊女の歌心<sup>(2)</sup>」は都と鄙、貴と賤との和歌の交流という論点から次のように述べている。

早く契っておけばよかったという、男への怨みには同じような(流浪する。新谷注)遊女の運命が流れているが、これはひなからくみ上げられた一首である。

しかし「怨み」と雑歌である事との関係、「ひなからくみ上げられた一首」とする根拠は示されていない。

また土橋寛『古代歌謡の世界』<sup>(3)</sup>は次のように述べる。

これはどういふ時の作か詞書も左注もないが、前後の歌から判断すると、家持の邸の宴席の歌と見られるのであって、純然たる賀歌ではないが、祝賀の意をこめた媚態的社交歌である。

しかしその「祝賀」の内実は分らず、またその根拠も示されない。

一方、注釈書にあっても比較的簡略に扱われ、訓釈はなされるものの、一首の作意を説いていないものが多い。そのような中で金子評釋(第四句の訓は「はなのあるときに」としている)は、次のように述べている。

惟ふに或は寓意の作か。御主人はもう妻定めて身を固めてしまはれたが、その前の仇めいた時代にお目に懸かれればよかつたのにとの艶情を寄せたものらしい。

この恋情表現とする見方は理解し得よう。しかし「花のある時」を「仇めいた時代」としている点はどうか。多くの女に心を移していた独身の時、といった意味に捉えているようだが、当時の「花」に、そのような例は無い。また「花橘」に男の寓意があるとするのも、後述するように無理があると思われる。

一首を挨拶歌として捉えようとする見方がある。窪田評釋、古典集成等である。後者から引用する。

花に出逢う意に、君に逢うことを寓して、もっと以前からもお目にかかりたかつたと、ひいきを願う挨拶歌。

挨拶性という点については部立が雑歌であり、宴席での歌と見られる所から、その蓋然性は高いように思われる。しかし「もっと以前から

云々」とする所はどうか。窪田評釋では「以前にも招きを受けたかつたといふ心」と述べている所である。「以前」という事を、「成る」及び「花なる時」という言葉で表現するものなのかどうか。時が過ぎた事を花について言うのであれば、「花散る」という例が普通である。更に「花」の春と「成る」秋、という時の経過に、どのような意味が込められているというのか分らない。そこに時の経過を見るときも何故「成る」なのか、何故「花であった時」なのか、を説明する論理を見出さなければならぬ。古典集成のような理解も疑問ありとせざるを得ないのである。

一首の理解の前に、まず第四句(原文「花有時」<sup>(4)</sup>)の訓と意味を確認しておく。旧訓は「はなのさかりに」である。「はなのさかりに」の例はある(17・三九九三歌等)ものの、この場合、用字に対し離れ過ぎており、この訓は無理である。結局、先の金子評釋や武田全註釋等の訓「はな(の)あるとき」か、現在の多くの注釈書の採る「はななるとき」かだが、用字からはどちらとも決められない。意味の上から二つの訓を考える。存在を言う「はな(の)ある」か、状態を言う「はななる」かである。第二句で花橘が実に成ってしまったというのだから、花について言うのであれば、「花が在った時」(存在)ではなく「花であった時」(状態)と言う方が適切だろう。「はな(の)あるとき」の訓は成立しないと考える。

更に意味について触れる。「なる」は指定の助動詞であり、ここは「(花橘がまだ実にならず)花であった時」の意と考える。しかし、新

編全集はこの訓を採るものの、次のように述べている。即ち「花が咲いている時、というのをハナナル時ということに多少疑問があり、ハナアル時と読む説もある」とし、この訓にも疑問が残ると示唆している。確かに、この句を新編全集の言うように「花が咲いている時」の意とするならば、落ち着かない表現である。しかし今述べたような「花であった時」と捉えるならば、この疑問は解消してしまおう。問題は訓にあるのではなく、新編全集のような意味の取り方にあると考える。尚、付記すれば、指定の助動詞「なる」に「有」字をそれに宛てた例には、「晩なる(奥手有)」「(8・一五四八歌)、「夕闇なるに(一は云はく、なれば)」「(暮闇有介(一二云、有者)」「(10・一九四八歌)等がある。

### 三 寓意

さてこの歌は何を歌ったものなのであろうか。雑歌である所から、季節(の景物)を歌ったものと考えるべきか。例えば実と成ってしまったが、橘の花を見たかったというような。そのような作意と取ると、述べたようにこの場合「花散る」という言い方が普通である。例えば次の家持歌を挙げる事ができる。

大伴家持の橘の花を惜しめる歌一首

わが屋前の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく実になりにつけり

(8・一四八九)

季節の歌としてではなく、宴席歌という側面から考えるべきなのであろうか。表現に「君」とあり、遊行女婦が宴席で「君」に歌い掛けたも

のとして表現を見て行こうという事である。しかしこの場合でも、眼前の実に成っている橘を措き、既に過去の物となってしまう花を称えるという表現は、宴席歌としては理解が難しいように思われる。宴席歌は基本的に現在を最高の時として称える、或は将来を約束された現在を称えるというものであるからである。<sup>(5)</sup>

単純な季節の歌、或は宴席歌ではないようである。一首には寓意があると見るべきであろう。注釈書の多くも寓意を認めている。この方向から考えてみたい。

「花咲く」「花散る」といった表現は、しばしば女の結婚に関連した譬喩として用いられる。例えば次のような歌である。

大伴宿禰駿河鷹の梅の歌一首

梅の花咲きて散りぬと人はいへどわが標結びし枝にあらめやも

(3・四〇〇)

大伴宿禰家持の藤原朝臣久須磨に報へ贈れる歌三首(内一首)

春の雨はいや頻降るに梅の花はまだ咲かなくいと若みかも

(4・七八六)

前者は寓意があるかどうか、歌表現だけからは不明だが、部立が譬喩歌であり、それを踏まえて理解しなければならぬ。作者は男であり、「花咲き」は、女が成人、つまり結婚できる年齢に達した事の謂である。そして「散りぬ」とは(他の)男と結婚した事を指すのである。後者は、娘に対する久須麻呂の求婚に、親である家持が答えたものと考えられている。「花…咲かなく」とは未成人の意味であり、一首は、娘が

まだ結婚年齢に達していないという理由でそれを断っている趣である。結局「花」は、結婚できる年齢に達している未婚の女の寓意を持つと考えられるのである。

尚、「花」は女に対してのみ使われ、男に対する譬喩としては使われなかったと考えてよいだろう。例えば家持に、「うるはしみあが思ふ君は石竹花が花に擬へて見れど飽かぬかも」(20・四四五一)という歌がある。しかしこれとても男(「君」は奈良麻呂か)が花に擬えられているだけで、寓意を持つものとして扱われているわけではない。

「花」の寓意についてだが、「石橋の間々に生ひたる貌花の花にしありけりありつつ見れば」(10・二二八八)という歌がある。この「花」は女の譬喩ではなく、誠意、実意が無い、といった意味で使われているものである。初句から第三句までが序詞で、一首は「実(じつ)の無い女だった、ずっと付き合ってみて」といった意味である。「花」にはこのような寓意を持たされる場合もあるが、しかしこの意味では当該歌を解釈する事ができない。

更に「花」に「盛り」の寓意を認めようとする全注の見方がある。ここでは当該歌の「花なる時」を「内外ともに充実し盛んな時の意を寓意する」としている。全注は根拠を示していないが、確かに、小野老の歌「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」(3・三二八)のように、「花」が「盛り」に結び付けられる表現はある。しかしこれも「花」が直接そのような意味を担っているわけではない。そのような寓意を認める全注のような理解は例が無く、無理である。また百

歩譲り、そのような理解を認めたとしても、一方の花橘が「成る」事の寓意としての意味、また一首全体の意義を解く事はできないだろう。全注は語釈のみに留まっている。

結局「花」は最初に検討したような、女の結婚に絡んだ寓意を持つと考えられるのである。以上、煩瑣な考証を行ったが、それは後に、「性」の問題に絡め、一首の意義を積きたいと考える為である。

次に「成る」について考えてみる。男女関係に於ては中西全訳注が「結婚する寓意がある」とするように、成婚の意に用いられる場合が多い。次の通りである。

大伴宿禰の巨勢郎女を娉ひし時の歌一首(注略)

玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神そ着くといふならぬ樹ごとに

(2・一〇一)

向つ峯に立てる桃の樹成らめやと人そ耳言く汝が情ゆめ

(7・一三五六)

前者は、結婚できる年齢に達しているにもかかわらず、結婚しない女(「実ならぬ樹」)には恐ろしい神が憑くと脅し、早く自分の求婚を受け入れるようにと迫ったものである。譬喩歌の部立の中にある一三五六歌は、第三句以下に主意があり、人々は我々二人の仲は成就しない、結婚できない(「成らめや」と噂している、だから心を引き締めていてほしい、というものである)。

今「成る」を成婚の意と考えたが、集中、次のような例がある。

藤原朝臣八束の梅の歌二首(内一首。注略)

妹が家に咲きたる梅の何時も何時も成りなむ時に事は定めむ

(3・三九八)

部立譬喩歌の中の一詩である。この「成る」について、女の「成熟」と捉える新編全集の見方がある。異論はあるものの、そのように取ると一首は、女が大人になった時に事を決しよう(結婚しよう)と理解する事ができ、分り易い。「成る」は、結婚に絡めて理解すべきとしても、やや幅を持たせて考えなければならぬのかも知れない。しかし当該歌にあつては、花の段階と実のそれとの間に断絶を見、事態を元に戻す事ができない段階に到ってしまったとの思いが、「ましものを」という反実仮想と詠嘆とが組み合わされている構文から読み取れる。この事から「成る」は、過去と現在とが連続する「成熟」よりも断絶の意味を含む「結婚」の意とすべきであると考えるのである。<sup>(6)</sup>

#### 四 讚美

これまで検討した結果をまとめれば、一首は「あなたの家の娘は結婚してしまった、結婚前にお逢いしたかったのに」といった寓意を持つ事になる。とすると女である遊行女婦が、結婚前に女に逢いたかったと歌っている事になる。女が女にこのように歌う事の意味は何処にあるのであるうか。「君が家」の娘が嫁いで行ってしまい、女の私は逢えず寂しいというのであろうか。しかしこのような理解は特殊に過ぎよう。反実仮想と詠嘆の組み合わせだった、強く惜しむ気持ちの表出にもそぐわないように思われる。女の結婚に絡んだ歌表現と、女である作者、遊行女

婦とはどのように結び付けられるのだろうか。

「花橋」・「花」を男に譬えたとすれば、遊行女婦が男にその結婚前に逢いたかったという意になり、理解し易い。先に掲げた金子評釋のような理解である。しかし「花」は女を寓意していると見るべきである事を確認している。逆に「花」である女に遊行女婦が男の立場で歌い掛けたものであるうか。これならば女がまだ独りで居る時に求婚し結婚したかった、という意になり落ち着く。遊行女婦は男の立場で歌ったのだろうか。

本稿は当該歌を、遊行女婦が男の立場から歌ったものと考ええる。そのように考える根拠は、越中で遊行女婦蒲生が、その介内蔵忌寸繩麻呂の館で行われた正月の宴で、次の歌を披露している事である。

死りし妻を悲傷びたる歌一首并せて短歌 作者いまだ詳らかならず

天地の 神は無かれや 愛しき わが妻離る 光る神 鳴はた少女  
携はり 共にあらむと 思ひしに 情違ひぬ 言はむすべ 為むす  
べ知らに 木綿襷 肩に取り掛け 倭文幣を 手に取り持ちて な  
離けそと われは祈れど 枕きて寝し 妹が手本は 雲にたなびく

(19・四二二六)

#### 反歌一首

現にと思ひてしかも夢のみに手本枕き寝と見るはずべなし

(19・四二二七)

右の二首、伝へ誦めるは遊行女婦蒲生これなり。

二首は挽歌だが、歌表現に見られる男の亡くなった妻への思いが、宴席にあつてそれを聞く官人達の、京に残した妻を思う気持ちに重ねられているのである。誦詠の意図は官人達の心を慰めるものであつた。<sup>(7)</sup> ところでここでは女の蒲生が、宴席にある男性官人達の心を担いつつ、男の立場で歌を誦詠しているのである。これを根拠として当該歌の遊行女婦も、場に居る男の心を担い、その立場から歌つたのではないかと考えるのである。

尚、この蒲生の誦詠歌は作者未詳の伝誦歌であつた。当該歌も同様の事情が考えられないであろうか。冒頭で述べたように、作者名を記さない題詞、また遊行女婦歌とするのみの注は異例である。「遊女の歌として伝誦した一首」という全訳注の理解、或は全注の「君が家の」に注して述べる「人を特定しない宴席のお座敷歌であつたのかも知れない」という指摘もある。これらを踏まえるならば、当該歌も作者を特定せず(できず)伝えられて来た歌である可能性はあるように思われる。<sup>(8)</sup>

男の立場から歌つた、という点に話を戻す。作者(或は誦詠者)が遊行女婦である事をここで措き、男の歌と考へ、表現世界内部に於ける歌の仕組を次に考へてみたい。女がまだ未婚の時に逢いたかつた<sup>(9)</sup>と歌う「男」の意図という事である。他の男と結婚する前に云々、という男歌は他にも例があり、この点については分り易い。男が女への思いを歌つたという理解である。しかしこのように取つた時、問題となるのは初二句であろう。「君が家の」という所から、歌は飽くまで「君」に向けられていると見るべきである。一方、女はその「家の花橘」であり、

「君」の娘という事になる。となると一首は、娘の親に向けられた、娘と結婚以前に逢いたかつたという歌になる。通常、男が結婚前に逢いたかつた、自分のものにしたかつたと歌う場合、歌はその当の相手の女に向けられていると考へられる。しかしこれは、相手の女ではなく、その女の親に向け歌われており、他の歌とは異なる。

言わば公の席で、結婚している女に未練を残しているかのような歌を歌うとは穩かではない。一人の女を巡つての複数の男の求婚は、「菟原処女の墓を見たる歌」(9・一八〇九〜一一一歌)等に見るように、男同士争ひ、更には女を巻き込んだ悲劇をももたらす。当の女に密かに打ち明けるのならばともかく、女の親にこのような歌を歌う事は許される事なのであろうか。

これをどのように考へたらよいのか。これまで作品世界の中で表現を考へて来た。男が人妻への思いを公の場で表出しているという問題を、歌表現の外に出て、遊行女婦の性が男ではなく、実際は女であるという所から考へるべきであらうか。しかし述べた蒲生の伝誦歌の例に沿つて言えば、やはりその宴に参加しているであろう男達の気持の代弁という事になる。直接にその女を挟んで男同士が「恋の鞘当」をするというような緊張は無いかも知れないが、やはり穩かではない事態に変わりない。

遊行女婦の自然性が女性である事も関係するとも思われるが、表現の面からもう少し考へてみたい。結句では「逢えたらよかつたのに」と歌われていた。これを逢いたかつたと思わせる程の素晴らしい女、という讚め言葉として捉え直す事ができないであらうか。次は「右大臣橘家に

宴せる七首」の中の一首である。

秋の野の草花が末を押しなべて来しくもしるく逢へる君かも

(8・一五七七)

宴席に参上しての阿倍虫麻呂の挨拶の歌だが、逢えた歓びを歌う事で諸兄を称えたものである。「逢えた、逢いたい、逢いたかった」と歌う事は、対象を讃める一つの形でもあったと見る事が可能である。当該歌の場合にも讚美の意味を含んでいると見る事ができよう。結婚する前に逢いたかったと歌う事で、結婚した女を称えたのだと考えるのである。称えるのであれば公の席という事にも適っている。本稿はこの見方を取りたいと考える。しかしここに讚美の意味を認めたとしても、依然として人妻への思いを表出している事に変わりはなく、問題は残るように思われる。

この問題については、女への思いの表出の背後に女への讚美の意味を認める一方、しかしそれとは別の意図もあるのではないかと考えてみたい。それを具体的に言えば、男が女を介しその女と結婚した男を、ある思い、嫉妬とか羨望といった思いの中に捉えているのではないかという事である。

このような理解は唐突だろうか。しかし根拠はある。例えば「遊松浦河序」の歌群に追和した旅人の次の歌である。ここでは関係する二首のみ掲げる。

後の人の追ひて和へたる詩三首(内二首) 帥の老

松浦川川の瀬早み紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ (5・八六一)

松浦川玉島の浦に若鮎釣る妹らを見らむ人の羨しさ(5・八六三)

ここでは省略したが、この「序」の中で、松浦河で娘子に逢ったという話が語られている。これらの歌もその作品世界を踏まえている。

八六一歌は仙女とも見られる娘子の姿を歌い称えたものであるが、娘子への思いを歌ったものとも言えるであろう。そして八六三歌では、そのような娘子と逢った人を羨ましいと歌っている。思いを表出する事(この場合は娘子への思い)と、それに関係する人(この場合、娘子に逢った「蓬客」)を羨む事とが、表と裏の関係になっている事が知られる。

男女関係の歌ではないものの、次も同じ構造を持つ歌と言えるものである。

島隠りわが漕ぎ来れば羨しかも倭へ上る真熊野の船(6・九四四)

山吹の繁み飛びくく鶯の声を聞くらむ君は羨しも(17・三九七一)

「辛荷の島を過ぎし時に、山部宿禰赤人の作れる歌」の反歌の一首である九四四歌は、「真熊野の船」が羨みの対象であり、船の向う大和が作者の思いの対象である。池主に贈られた家持の三九七一歌は、池主が羨みの対象、池主の聞く鶯が思いの対象である。

「羨む」という言葉こそ見られないものの、当該歌にこのような構造が隠されていると見る事はできないであろうか。結婚した女への思いを歌う事で女を価値ある者として称え、そしてその背後に居るその女と結婚した男を羨むという構図である。更に男を羨むとは、自分が思いを寄せられるような素晴らしい女と結婚できた男を羨んでいる訳であり、男を称

える意味をも持つように思われる。価値ある女を得た事で男は価値あるものとして羨まれる、という事である。また結婚という社会的な行為に對してであれば、公の席での歌という事にも合致する。結論を言えば、一首は女の親に向けられたものであるが、結婚した女への思いを歌う事で、当事者である男と女を共に称えたものではないかと考えるのである。述べて来た事を直接、証明する万葉歌の例は無い。男が女を介し、その女と結婚した男を称えるというような万葉歌の例は、他に無いのである。しかしこの事は、本稿の主張の根拠の危うさを示すものではなく、逆に遊行女婦が特殊な女であり、特殊な歌を歌ったと考える本稿の見方を支えるものと考えている。

本稿は当該歌を、女を介した男の男に對する羨望という、言わば「三角関係」の中で理解しようとした。それとは異なり、男が男を介して中に挟んだ女を称えるという例ではあるものの、同じ「三角関係」の構図を持つ歌を見る事で、本稿の理解の傍証としたい。對の男女の一方を、對から外れた男が羨やむ事で、對の一方を称えるというものである。

次の歌を見られたい。事情は不明だが、「難波宮へ宮仕えに出かける女性を送る歌」(古典集成)、或は「作者の任国から采女などを貢進した時に、これを見送って詠んだものか」(完訳)と見られているものである。

大伴宿奈磨宿禰の歌二首 佐保大納言卿の第三子なり  
うち日さす宮に行く児をまがなしみ留むれば苦しやればすべなし

(4・五三二)

難波瀉潮千の波残飽くまでに人の見る児をわれし羨しも

(4・五三三)

問題は五三三歌だが、組となつて五三三歌も併せて掲げた。

異論はあるが、五三三歌第四句「を」は感動の助詞であり、第五句「羨し」の対象は「人」、つまり女を「飽くまでに」「見る」男と考えられる。一首は、そのような男が羨ましい、というのである。そしてそのような男への羨望を歌う事は、翻つて女の素晴らしさ、女への思いを表出している事になろう。五三三歌は正にそのような女への男である作者の思いを歌つたもの、という事になる。当該歌と同じ構図がここに見られるのである。

更にこの歌の羨望の内実について述べておく。今、羨望と述べたが、しかし羨望と言ってもこの場合、男(人)が女を見る時点は将来の事であり、その男がどのような男であるかも全く定まっていない。将来に於てもその男を知る事は無いと考えた方が良いかも知れない。とするならば、作者の男への思いは何等実体の無いものと言えるだろう、つまり羨望の感情は、対象が無い為生じようがなく、実際に生じていないのではないかと考えられるのである。そしてその事により、男への羨望は霧散し、女への讚美だけを意味する表現になっていると考えられるのである。このように一首を捉えるならば、古典集成や完訳の言うように、「女を宮廷に送り出す歌」として適切なものと考えられて来よう。

今述べた、羨望は霧散し、讚美の意味だけが残る、という点について、当該歌では「花橘は成りにけり」が果しているのではないかと考える。

先にも述べたが、事態を元に戻す事ができない状況、あるがままの事態を承認しなければならないという現実が前提とされる事で、歌の構造としての羨望は実体を伴わないままに霧散し、当該歌一首は讚美の歌に成り得たと考えるのである。

## 五 おわりに

論証は曲折を辿ったが、述べたかった事は次の通りである。即ち、遊行女婦は男の立場で歌った事、歌の内容は結婚前にお逢いしたかったというものであり、参上した家の娘を称える意味を持った事、そして更にその娘を娶った相手の男を羨望という形を取って称えたという事である。具体的な場面を想定する事は無謀かも知れないが、敢えてそれを犯すならば、女の家を男を迎えた宴での新婚寿歌といったものではなかったろうか。参集した男達の気持を女への思いという形で括る事により、一組の新婚の男女を言祝ぎ、更には婿を迎えた女の家を言祝いだのではないかと考えるのである。

## 注

- (1) 万葉集からの引用は、中西全訳注による。
- (2) 講談社『中西進万葉論集 第五卷 万葉史の研究(下)』平成八年五月
- (3) 塙書房 昭和四三年七月
- (4) 第四句原文は、西本願寺本等仙覚本系が「花乃有時」、非仙覚本系の類聚古集、紀州本、広瀬本が「花有時」となっている。西本願寺本を底本とする

最近の注釈書も、後者の「花有時」を本文としているように、ここは非仙覚本系を元の形と認め、これを本文とする。

(5) 森朝男「景としての大宮人―宮廷歌人論として」(有精堂『古代和歌と祝祭』昭和六三年五月)が、宴の歌の表現に見られる「今日」について、他の日と区別された特別な日の意を持つとしており、参考になる。

(6) 中西注<sup>2</sup>論の「早く契っておけばよかった」という理解が支持される。但し中西はこれを「遊女」の「男への怨み」と捉えている。

(7) 伊藤博「歌の転用」(塙書房『万葉集の表現と方法上 古代和歌史研究5』昭和五〇年一月)

(8) 集中、遊行女婦が一つの場に複数で現れる事は無いが、『うつほ物語』藤原の君(おうふう本)の絵解の部分に次のような例がある。

ここに、人々、あて宮の御琴遊ばす聞くとて、河ほとりに居給へり。君達の御前に、遊女(うかれめ)二十人ばかり、琴弾き、歌歌ひて、御衣賜はれり。

人々の遊びに遊行女婦が参加し、共々歌っている。これを参考に、当該歌の異例の題詞について、複数の遊行女婦が合唱する事で作者名を特定し得なかったものか、或は共に合唱できる程に遊行女婦の間では歌が流布し、作者が誰であるかが問題に成り得なかったものかと考えている。しかし『うつほ物語』の例は時代も異なり、述べた遊行女婦の合唱という事も推測の域を出ない。